

たとえリセットされても

愛は本当にロボットなのか

4年 Y・Mさん

「たとえリセットされても」は、主人公の愛が転校して、柚果ちゃんたちとの友情を深め合いながらも、自分がAIロボットだということに気づいていくストーリーだ。

ぼくはこの本を読んだ後、二つの立場から考えてみた。一つ目は主人公である愛の立場で、二つ目は愛の友だち（はるね、柚果、大樹）の立場だ。

まず、愛の立場から考えてみる。愛はお母さんから自分がロボットだと聞いた時に、頭が混乱して不安になっていた。終業式の時、愛の記憶がリセットされてもみんなが愛のことを覚えていてくれると言われ、愛は感動し、感謝していただろう。これに関してぼくにも同じ体験がある。それは四年前、ぼくがアメリカから帰国する時だった。その時は友だちと会えなくなってしまう悲しい気もちより、「友だちになつてくれてありがとう」や「元気でいてね」などの感謝の気もちが強く、帰国してからも不安ではなかった。

次に、愛の友だちの立場から考えよう。愛のお母さんたちをさけながら、大樹のおばあちゃんの家へ行くのに協力したのは、愛の親友として少しでも助けたかったからである。ぼくも、だれかを手伝ったり助けたりしたことは何回もある。例えば、だれかが学校で問題をとくのにつまづいている時にとき方を教えて助けてあげたことがある。一人が一人を助けると何人かが徐々に集まって来て、さらに多くの人がその一人のために協力するようになる。そして、だれかを助けるといつか必ず自分にいいことが返ってくる。その結果、全員が幸せになれる。

もう一つ、考えたいことがある。それは、愛が本当にロボットなのかということである。はるねが言う通り、ふつうのロボットに感情がないが、このストーリーを通して愛には感情があるように思える。なぜなら、愛が自分のお母さんの言う通りの行動とは反対の行動を取ることもあったからだ。ロボットはプログラムにしたがうはずなのに、愛は食べちゃいけないはずのケーキを食べたのだ。他にも、自分固有な感情を持っていた場面もあった。その一つが、自分がロボットだと知った時、柚果やお母さんとはちがって愛は「混乱」や「不安」という感情を持っていたことだ。ぼくには、ふつうのロボットとはことなる性質を持っているように思えたのだ。

自分の感情を持ちながらも人間のようにわかち合い、周りの人間と協力できる愛のようなロボット。そんなロボットがいつかそんざいし、活用される日が来ますように。ぼくはそう思った。